

## 第 1 回有識者会議の議論の整理

### 1 現県民会館の課題に関する意見

- ①オーケストラピットが手動であるため、取り外し・再取り付けが困難である。このため、オーケストラピットを使用するオペラ、ミュージカル、バレエ等、多くのジャンルの演目に影響が及んでいる。
- ②舞台の奥行きや袖も狭い。現在の敷地では舞台を広げて演者が使いやすくするのは困難である。
- ③利用者（演者）から見て、楽屋周りなど、ホール裏側のアメニティ・環境が整っていないため、利用者（演者）がスムーズに利用できるよう改善が必要である。そのためには楽屋や廊下の広さを確保するため、相当な敷地が必要となる。
- ④車道（定禅寺通）からホール内の客席までの距離も近く、観賞に向いているとは言い難い。
- ⑤女性用トイレが特に少ない。搬出も 24 時間体制にするなど、思い切った考えでやらないと最新のコンテンツの提供もうまくいかない。

### 2 県民会館の整備に求められる基本的な方向性・機能等に関する意見

#### （1）ホール需要等

- ①需要調査からは、県内にはポピュラー音楽や商業系のミュージカル等に適した施設が足りないという印象を受けた。今後は、県内だけでなく東北地方全体の需要を考えて地域の要となる新たなホール施設が必要である。
- ②ポピュラー音楽のライブが非常に好調であり、音楽のネット配信など、テクノロジーの進歩による音楽の裾野の拡大で、幅広い年代のファンがライブに参加しており、高齢者だけでなく、若者のライブ観賞需要も多く、観客動員数の底上げにつながっている。
- ③ホールに対する需要は多く、音楽が手軽に聞けるようになり、さらに生のライブ観賞需要が拡大することで、人口減少の中であってもライブを通じた交流人口が今後も増えていくと見られる。県民会館の集客効果を県内だけを範囲として考えるのか、それとも県外からの交流人口を増やすのかという視点で考えなければならない。
- ④仙台には演劇をしっかりと演じられる場所がなく、小規模な劇場も含め、演劇活動ができる場所が少ない状態である。

#### （2）整備の方向性

- ①2千席規模のホールを今の敷地で作るのは難しく、ほかの場所で作るのであれば、県としてやるべきことを整理すべきである。需要調査でも演劇の創造に使えるような小規模な施設が必要としており、2千席規模のホールだけでなく、複合的な機能を考える必要がある。
- ②県のホール施設としては、創造、普及など文化政策上、ホール施設に求められている機能を備え、かつ商業的な要求にも応えられるホールが望ましい。また、人材育成など市町村への支援機能を持つことで、単に大規模な興行をやるためではなく、仙台市がつくる施設とも違う意義を持つものとして、県の施設機能を考えるべきである。

- ③仮に2千席規模のホールをつくるのであれば、ホール利用が実演芸術の自主制作が主体か、または貸館が主体かによってホールのスタッフ配置も異なる。仮に自主制作主体であれば、他県の例から見ても相当なスタッフの配置が必要になる。
- ④誰のためにつくるのかが重要であり、演者や観客は、最善のことが手に入る状態であれば満足するが、ホールがあることで、地域の人々や、環境に対して、どのように社会的にトータルとして影響を与えるかということをも重要視しなければならない。
- ⑤施設整備に当たっては、今は不足しているものを充実させて、やりたいことをどう選んでいくかが必要な視点である。
- ⑥山形県や秋田県・秋田市のホール建設は、数百億円規模の事業となっている一方で、立ち見の会場ではあるが、十数億円ほどの建設費で千5百人が入るライブ会場ができる。施設整備に当たっては、コスト意識を持ち、引き算で考えることも必要である。

#### （3）ホールの規模

- ①ホールの規模、キャパシティが多いほど集客力につながり、アーティストやイベント主催者にとっても、観客にとっても魅力ある施設となる。
- ②大きな場所があれば、全国大会なども行うことができる。「何でもできる」ということをキーワードにしつつ、施設の規模・大きさが何のために必要なかを明確にすべきである。
- ③メインのホールを2千席規模として、小規模ホールも併設すれば、利用者にとって施設としての選択肢が増える、そのための敷地の確保が望ましい。
- ④外国のホールでは同じフロアの中に必要な機能が全て備わっているなど、基本条件がしっかりとしている。これからの整備の仕方、備えるべき機能というところでは大事な観点になる。
- ⑤そのホールを使って将来的に何をするのかによって、施設全体の規模などが大きく左右される。

#### （4）広域性

- ①ホール・劇場は、集客効果によって交流人口を生み出すことを踏まえれば、地域の境界を取り払った形での事業展開が必要である。
- ②ライブツーリズムという「コト消費」の形で、コンサートを求める多くの人たちが全国各地のコンサート会場を移動している。県民会館もアジア等からのインバウンドも含め、国内外からの集客効果を意識すべきである。

#### （5）開放性

- ①市民の多くの人たちに開かれた場所であること。開かれたという解釈が多様化している中で、どういう開かれ方を採用するか、そのビジョンを持つべきである。
- ②ホールのある場所として、広がりがある、佇むことができる、人がそこで歩いたり、会話したりできる、そうした広がりが街の中で持続性を持っているのが重要であり、せんだいメディアテークがそうした機能を獲得していることを参考にすべきである。
- ③コンサートがないときであっても人が集まるような機能を持つ県民会館であってほしい。

- ④ホールがある場所で常に何かが行われて、何かが体験できる、ホールに集まる人々が交流し、体験を通して新たな何か生まれるということもホール施設整備の効果である。
- ⑤例えば演劇をコミュニケーションツールとして扱い、高齢者の孤立を防ぐなど、人が集まるという場としてのホールを活用する考え方もある。
- ⑥ホールとしての機能が全て備わっていれば理想だが、県民にとって負担になることも考えなければならない。新たな県民会館を整備するならば、県民が繰り返し施設を楽しめるよう、物産館などを備えた施設にしてほしい。

#### (6) 市町村連携・人材育成

- ①劇場法やその指針を踏まえ、県民会館は、県の文化振興の基幹施設として市町村のホール施設と協力すべきであり、スタッフ研修の場の提供や、公演の共同制作などを通じて、市町村のホール施設を担う人材育成の場として機能を果たすことが必要である。
- ②県と市町村が連携するに当たっては、教育普及を目的とした専門的スタッフの配置が必要である。ハード面での整備検討と併せて、スタッフ配置のイメージを持つべきである。
- ③県は、広域自治体として市町村との間で県民会館を活用したネットワークのハブ機能を持つべきである。また、文化的な環境が十分ではない地域でのアウトリーチなど、市町村ではできないところを県として補うべきである。
- ④県内各ホールのスタッフの人材育成を県がサポートすることが大切であり、ステージ裏方の仕事や、ホールの運営について、経験し、育成できる場が必要である。
- ⑤ホール・劇場から何を発信していくのかを考えるとともに、ホール・劇場をベースにして、実演芸術を担う人材を育てて社会に送り出すことができるようホール・劇場のあり方を考えるべきである。

#### (7) 役割分担

- ①ホールが持つべき機能への要求が増えており、要求の達成が難しくなっている。複数のホールで機能分散を図り、それぞれのホールが持つ機能を高め、県全体として構成することで文化振興の底上げにつながる。
- ②新たな県民会館が整備されることで仙台市内のホール利用の選択肢が増える。県と仙台市の間で役割分担を図ることが必要であり、選択肢や可能性が増えれば、利用団体の活動の幅がさらに広がる。

#### (8) 技術革新対応

- ①ポピュラー音楽のコンサートでは、舞台設備上で使える技術・テクノロジーがここ数年で大きく変わってきている。照明のLED化や、音響のデジタル化など技術的に追いつくのが難しく、変化に対応できないホールは、使えないホールになってしまう。
- ②ホールの機能を支える設備については、近年テクノロジーの進化が著しく、最新の設備であっても5～10年で陳腐化してしまう傾向にある。テクノロジーの進化に対応していくことを前提にホール整備を検討する必要がある。

- ③改修工事をする場合でも決定に至るまでのプロセスの長さや時間経過により、最新のテクノロジーの変化に対応しきれない場合も想定される。

#### (9) 現地建替

- ①仮に現在地で建て替えるとすれば、かなり小さく、ダウンサイジングでコンパクトにつくことも考えとしてはあり得るが、今回の議論も踏まえた県の拠点文化施設としての命題とは異なるため、現地建替は方向性としては考えにくいのではないかと。
- ②ホールのあり方が法的にもはっきりとしてきており、人材育成や開かれた広場として、県民会館がその機能を担うべきである。それを具体的な建物に落とし込んだときに、どのような場所、敷地が必要になるのか。現在地では、必要なキャパシティや機能も盛り込もうとすると、相当厳しいのではないかと。
- ③仮に立地が現在地に限られるということであれば、小規模であってもクオリティーの高い作品を送り出せるようなホールをつくれれば、「将来はその舞台に立ってみたい」と思うような演者の憧れの場所となり、次世代を担う実演芸術の人材が輩出できる。
- ④現県民会館は老朽化が著しく、これに手をかけ、お金をかけてというのは、あまり有効なことではない。現在地にも立地の課題があるため、新たな場所で、ホールの交流・発信等の機能や、人材育成機能を踏まえて建てるべきである。

#### (10) これまで培ってきた機能の継承

- ①現在の県民会館が醸し出す雰囲気は、一旦失ってしまうと簡単には元に戻せない。単に最新の技術で新しい施設をつくれれば、役割を果たしたということではなく、これまで培ってきた建物の趣や、佇まいを継承していくことも、新しい施設にとって意味がある。
- ②現在地がどうなるかも大事な要素である。現在地で培ったことや、残された場所に関わる人たちにどう受け継がれていくかということを考えて、新たな県民会館の整備に生かしていくことも必要である。
- ③移転した場合の跡地をどう生かすか、海外にも見習うべき良い事例があるため、分析や選別をしながら検討していくことも必要である。
- ④これまで培ったことを踏まえて新たな県民会館の整備を検討すべき。どうすれば新たな県民会館を後世に伝えていけるかということを、しっかりとシナリオ、事業として構築し、プロジェクトとして進行するべきである。
- ⑤劇団四季のロングラン公演も県民会館の強力なコンテンツのうちの一つであり、今後どう活用していくかも考えるべきである。